

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：17702

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520682

研究課題名(和文) 海外遠征アスリートの英語学習支援ソフトの開発

研究課題名(英文) English material development for athletes to join overseas competitions

研究代表者

吉重 美紀 (Yoshishige, Miki)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号：80156265

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：平成23年度は、アスリートが2つの競技(自転車、ヨット)で海外遠征や試合に出た時、頻繁に出会う可能性の高いコミュニケーション場面を、アスリート等へのアンケート調査で抽出した。ヨットはプロテスト(抗議)で、自転車は移動時の道順を尋ねる際最も英語が必要な事が判明した。平成24年度は、前年度実施できなかった剣道について同様のアンケート調査を実施し、前年度の調査結果を学会等で発表した。

平成25、26年度は、アンケート調査の結果から、英語を必要とする各場面で必須の語彙や表現等を抽出するため大会資料や文献等を収集した。また教材開発のため動画を主とした英語のe-learning教材を購入した。

研究成果の概要(英文)：The students in the cycling and the yacht clubs at the National Institute of Fitness and Sports in Kanoya participated in the study in July of 2011. Through a questionnaire, Yachtsmen and yachswomen expressed the most need for English for the purpose of protesting during competition, and cyclists expressed the most need for English in asking for directions. The students of the Kendo club also participated in the study in 2012, and the researcher gave presentations at some conferences to report the results of the study.

During the latter half of the period for the present study, the researcher gathered some application guidelines for overseas competitions and papers related with yacht and cycling. For material development in ESP, the researcher purchased a kind of English e-learning material focusing on speaking and listening based on a lot of videos.

研究分野：英語教育、第2言語習得

キーワード：アスリート 自転車競技 ヨット 海外遠征 プロテスト(抗議) 英語学習支援

1. 研究開始当初の背景

(1) 大学英語教育において ESP 教育の必要性が叫ばれるようになって久しい。ESP 教育は「日本の大学英語教育に不可欠で」(深山 2000)あり、また「日本における英語教育の行き詰まりを打開するきわめて有効な教授法」(横山 2005)でもある。近年国内の ESP 教育の研究は、法学、工学、医学、看護学の分野では行なわれているが、スポーツを含む体育学分野の調査研究は極めて少ない。

研究代表者は、平成 22 年度夏国外での ESP 教育の現状を探るべく、英国の BALEARP (British Association of Lecturers in English for Academic Purposes) の理事 Olwyn Alexander 教授を訪ねた。現在英国では、大学でのスムーズな研究を目指した EAP 教育が行なわれており 80 以上の大学が BALEARP に加入し、学会開催のほか会員が様々な情報交換を行なっている。また教員のための Competency Framework for Teachers of EAP (2008) が作成され、それに従って各大学が EAP 教育に取り組んでいる。英国を含む欧州では ESP/EAP 教育が始まって久しいものの、日本では 90 年代頃に大学英語教育学会 (JACET) に ESP 研究会ができ最近各地域の連携が始まったばかりで、まだ日本における ESP 教育は研究も実践もこれからと言えよう。

(2) 研究代表者は、勤務校の国立体育単科大学の 1,2 年生を対象に「体育大学における英語教育」に関する調査を実施し、体育スポーツを専攻する学生のニーズをアンケート調査により明らかにした (橋口 2004)。また工学部、水産学部、医学部学生のニーズ分析与比較した調査では、スポーツ専攻の学生は、他学部生より海外に出る機会が多い反面、英語の授業でしか英語に触れない実態も明らかとなった (吉重 2005)。平成 22 年度は勤務校の教員を対象に専門英語教育に関するアンケート調査を実施し、専門教員のニーズに

ついて調査した。この調査がきっかけとなり専門教員の中で学生の英語教育に関心があり、かつ海外遠征に出かける機会の多い実技のクラブ顧問教員から本研究に対し協力ももらえる事となった。

2. 研究の目的

本研究では、以下の 3 点を明らかにすることを目的とした。

(1) アスリートが 3 つの競技 (自転車、ヨット、剣道) で海外遠征や試合に出た時、頻繁に出会う可能性の高い場面の抽出。

(2) それぞれの場面のコミュニケーションに必要な各競技に特有の英語の語彙や表現の抽出。

(3) 2) で明らかになった語彙や表現を使った実践的教材を作成し、アスリートの英語運用能力の向上をはかる。

3. 研究の方法

本研究では、下記のような計画・手順によって研究を進めた。平成 23 年度は、3 競技の競技規則集やこれまでの大会要項等を集め、それを基に各競技に特有の語彙、表現等を日本語と英語で抽出する。24 年度は、各競技の海外遠征に同行して海外で遭遇するコミュニケーション場面をビデオ録画し、ビデオから必要な語彙、表現 (英語) 等を抽出する。25 年度は、2 年間で抽出された語彙、表現等を比較 / 分析し、それらを使ったシチュエーション (場面) 中心の 4 技能を含めた英語の総合能力を伸ばす教材を作成する。最終的には、アスリートの海外遠征の場面に特化した語彙、表現リストを備えたスポーツの ESP 教材を完成させる。

4. 研究成果

(1) 海外遠征アスリートの英語学習支援ソフトの開発を見据え、まずは 23 年度本学 2 つの競技団体、自転車部とヨット部の海外遠征における英語のニーズを調査した。アンケ

ート調査からは、本学自転車、ヨット部選手の英語の必要性は9割と高いことが明らかとなった。これは2つの部の約半数に海外遠征経験があるため、海外遠征未経験者にもいい意味で影響しているのではないかと思われる。北海道の産業界で調査した英語全般の必要性が3割だった（ESP北海道2007）ことと比べても、9割はかなり高い値と言えよう。また競技で使う「専門英語」、日常使う「一般英語」そして「基礎的な英語」では、「競技専門英語」(62%)よりも「一般英語」(72%)「基礎英語」(72%)の必要性が高かった。

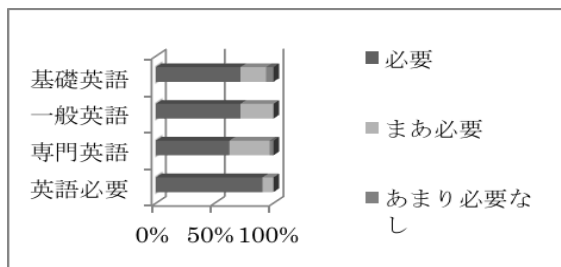


図1 海外遠征における英語の必要性

(2) 海外遠征において特に英語を必要とする場面について、ヨットは「プロテスト(レジスト、抗議)」(63%)、「生活時のコミュニケーション」(50%)、移動時の「入国手続き」(38%)と、大会時のプロテストで特に英語を必要とする一方、生活時のコミュニケーションでも英語を必要とする事がわかった。

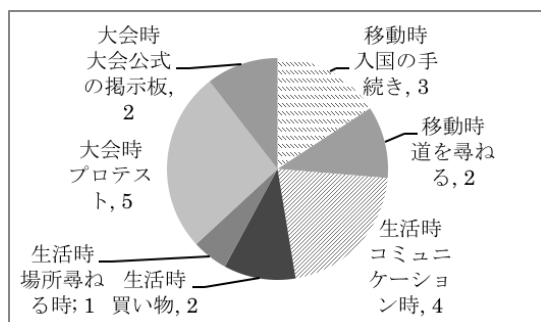


図2 海外遠征で英語が必要になる場面 (ヨット)

(3) 自転車では、移動時の「道を探ねる」(40%)、大会時「レース中」(36%)、移動時の「交通手段-運賃・乗り降り・時刻・行

き先等」(28%)、「入国手続き」(28%)、生活時の「食事」(28%)という結果で、「移動時」に英語を最も必要とする事がわかった。これは自転車競技の場合、特に広範囲に場所を移動しながら競技が行なわれるという特徴に起因するものと思われる。「レース中」英語を必要とするのも、コースに関する情報を他の選手等から得なければならないからだと推測される。

(4) 海外遠征で英語を必要とする理由についてヨットは、「審判の判定」7人(37%)、「他国選手との交流」6人(32%)、「事前準備」3人(16%)と続いた。上記ヨットで英語を一番必要とする場面が「プロテスト」であった事に対応し、「審判の判定」が英語を必要とする理由の一番である。勝負の世界で、いかに英語をはじめ語学力が勝敗を決める要因となっているかがわかる。

(5) 海外遠征で英語を必要とする理由について自転車は、「他国選手との交流」「ドーピング関連」がともに13人(26%)で、理由の半数を超えた。次に「事前準備」11人(22%)、3番目に「審判の判定」9人(18%)、「参加の署名」4人(8%)となった。

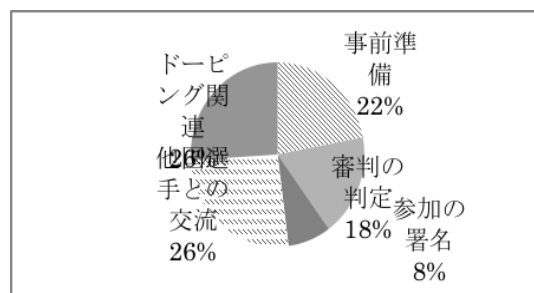


図3 海外遠征における理由別英語の必要性 (自転車)

上記調査については、予定した本学アスリートのみならず、ユニバーシアード大会や室内自転車競技国際大会など学外のアスリートも対象に調査を実施できた。

(6) 海外でのビデオ録画については、海外競技大会には同行できなかったが、研究分担者のおかげで、フランスのヨット大会の写真や英語表示等の資料、および米国開催のヨット大会の資料等を収集できた。また自転車競技については、競技者向けイタリア語の初級教材を収集できた。

(7) 自転車競技大会の申込書や国内で海外講師を招いて行われたヨットの講演の録画等も収集できた。ペーパー教材から映像等を含んだ教材開発のため、最終年度は、動画中心の e-learning 教材を購入し、現在、本学の国際競技大会特別強化指定選手（自転車、カヌー、柔道）等に使用させており、そのフィードバックを教材開発の参考とする予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

吉重美紀, Needs Analysis of Athletes in Overseas Competitions: in Cycling and Yachting, ESP の研究と実践、査読有、第 11 号、2014、25-34

吉重美紀、アスリートの海外遠征における英語のニーズ-自転車、ヨットの場合--、鹿屋体育大学国際交流センター研究報告、査読有、第 9 巻、2012、11-24

吉重美紀、専門英語教育に関する教員のニーズ分析、九州英語教育学会紀要、査読有、第 40 号、2012、137-146

吉重美紀、海外遠征アスリートの英語のニーズ-自転車、ヨットの場合--、平成 24 年度工学教育研究講演会講演論文集、査読有、平成 24 年度論文集、2012、394

吉重美紀、海外アスリートの英語のニーズ分析、第 38 回全国英語教育学会愛知研究大会発表予稿集、査読有、2012、148-149

〔学会発表〕(計 3 件)

吉重美紀、海外アスリートの英語のニ

ズ-自転車、ヨットの場合--、平成 24 年度第 60 回工学教育研究講演会（招待講演）、2012 年 8 月 23 日、芝浦工業大学

吉重美紀、海外遠征アスリートの英語のニーズ分析、第 38 回全国英語教育学会愛知研究大会、2012 年 8 月 4 日、愛知学院大学日進キャンパス

吉重美紀、アスリートの海外遠征における英語のニーズ-自転車、ヨットの場合--、大学英語教育学会九州沖縄支部第 17 回 ESP 研究会、2012 年 2 月 18 日、鹿児島大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉重 美紀 (YOSHISHIGE, Miki)
鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授
研究者番号：80156265

(2) 研究分担者

樋口 晶彦 (HIGUCHI, Akihiko)
鹿児島大学・教育学部・教授
研究者番号：20189765

(3) 研究分担者

榮樂 洋光 (EIRAKU, Hiromitsu)
鹿屋体育大学・スポーツ武道・実践科学系・助教
研究者番号：50546760